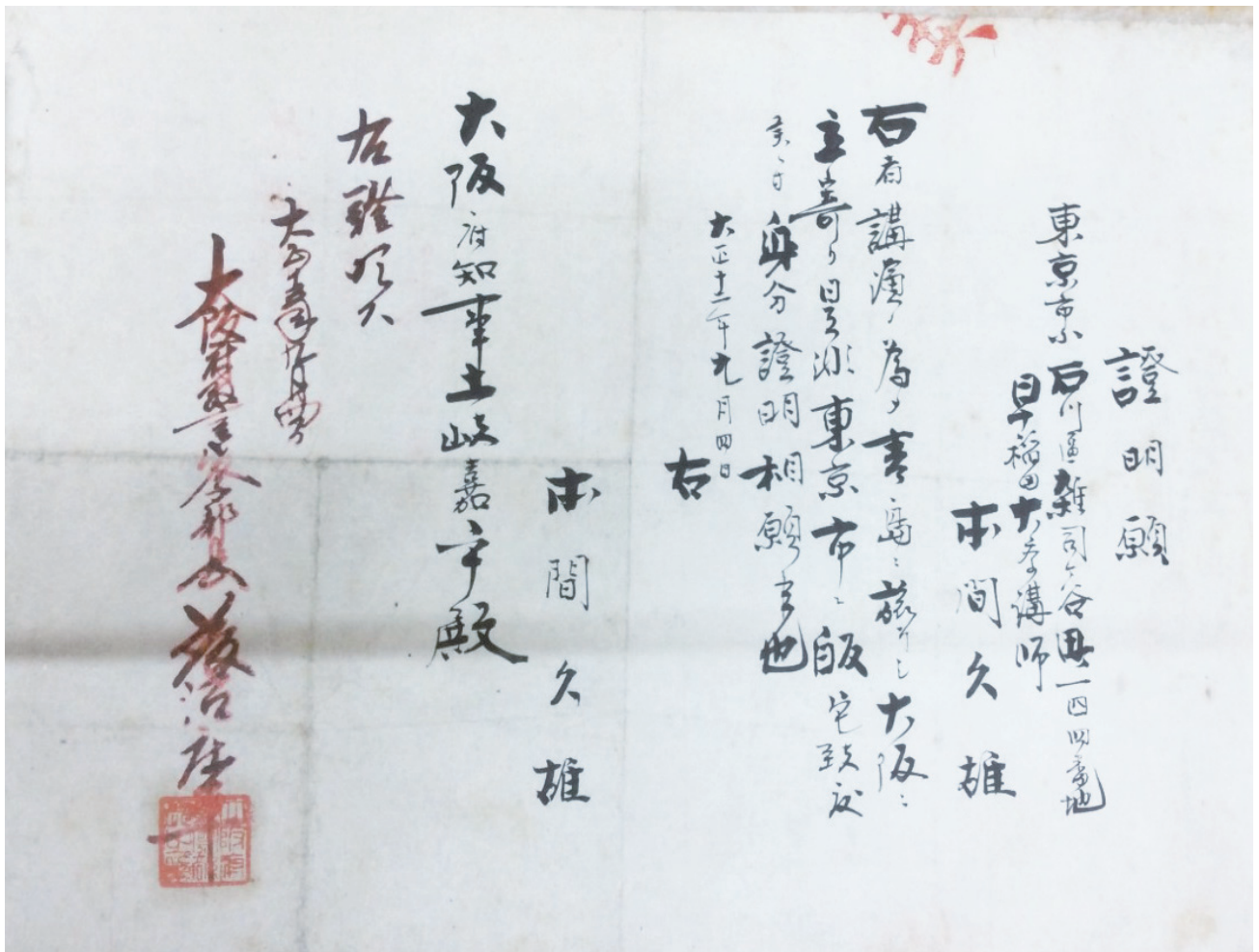


<新収資料紹介>

本間久雄身分証明願：大阪府知事宛（本間久雄文庫追加資料）

齋藤 和子（事務副部長兼資料管理課長）



本学名誉教授本間久雄（1886～1981）は、英文科を卒業後、『早稲田文学』同人として評論活動を行い、後には同誌を主宰。1931（昭和6）年に文学部教授に就任、英文学の講義のほか国文学科では「明治文学史」を講じた。早稲田大学図書館は本間が収集した近代文学関係資料を「本間久雄文庫（文庫14）」（以下、「本間文庫」）として収蔵している。自筆稿本や図書のほか、近代文学者・作家の書簡や書幅、自筆原稿など、貴重な生の資料が多く含まれるコレクションである。

この度、御令孫である城戸颯子氏、平田耀子氏、星川熙氏より、本間文庫への追加資料として、書画、書

簡類のご寄贈をいただいた。これらのうち、『早稲田文学』の表紙絵、挿画として用いられた絵画は2019年3月22日～4月25日に開催した展示にて紹介することができた。この展示の様様については本号別稿（p.8-9 山本由枝「展示「第二次『早稲田文学』を飾った挿画たち—本間久雄旧蔵資料から—」を振り返る」）を参照されたい。

城戸颯子氏からの寄贈資料の中に含まれていたのが当該資料である。内容は以下のようにになっている。

證明願 東京市小石川区雑司ヶ谷町一四四番地 早稲田大学講師 本間久雄 右者講演ノ為メ青島ニ旅行シ大阪ニ立寄り是非東京市ニ販宅致度候ニ付身分證明相願事也 大正十二年九月四日 右 本間久雄 大阪府知事土岐嘉平殿

末尾には同日付の大阪府警察部長による「右證明ス」とした署名がある。

さて、この日付にご注目いただきたい。大正12年(1923)9月4日は、9月1日に発生した関東大震災の直後である。

当時本学講師であった本間が、中国の青島に講演旅行し、関東大震災が発生した直後、帰国して大阪に立ち寄った。自宅に帰ることができず困った本間が大阪府知事に、東京へ帰れるよう身分を証明してほしいという願いを出したものである。

震災発生は大阪でも新聞などのメディアで報道されており、本間は家族は無事か、家はどうなっているかと不安に駆られていたに違いない(幸い、本間の住まいの小石川区(現在の豊島区)雑司ヶ谷は、比較的震災の被害は小さかった<sup>1)</sup>)。9月2日には東京府の一部地域に<sup>2)</sup>、翌3日には東京府全域に戒厳令が一部施行された<sup>3)</sup>。3日、関東戒厳司令官は戒厳令をうけ命令を出し、各要所に検問所を設け、時勢に妨害ありと認める通行人の出入禁止とした<sup>4)</sup>。4日の新聞は東京への入京禁止や、梅田駅で必要外の者への切符の販売を行わない方針を伝えている<sup>5)</sup>。おそらく切符を手に入れるため、本間が身分証明を願い出たのであろう。

本間は関東大震災を機に近代文学研究に軸を移す。この事情について彼は、著書『明治文学史 上巻』(『日本文学全史』10, 東京堂, 1935)の序で次のように記している。

稿者は、十年前、雑誌「早稲田文学」を主宰してゐた時、『明治文学研究号』と銘を打つたもの、七巻、一千三百余頁を編纂したことがあつた。

それは、例の大震災直後のことで、我が伝統文化の結晶ともいふべき貴重なるかずかずの芸術品や稀観本などが、無惨にも焼失したといふ噂を毎日のやうに耳にしてゐた時であつた。せめては明治文学に関する諸文献だけでも、まだその散逸せず、煙滅しないうちに

これを蒐集整理して、その記録を残して置くことは、後の文学研究上極めて重要なことである。稿者はかく考へて、其当時としては異常な苦心を払ひながら、上記研究号七巻を編纂したのであつた。(中略)稿者が、明治文学に特別な関心を持ち、やがてはその研究の結果を世に問ひたいと思つたのは、実は其頃からであつた。(原文旧字体)

こうして本間は1925年から1964年にかけて大著『明治文学史』全5巻を完成させる。本「證明願」は、本間の転機となった震災という出来事直後の、彼の動向を知らせる興味深い資料といえよう。

さて、この「證明願」であるが、このような緊迫した状況の時に書かれたにもかかわらず、字が整い肥瘦・大小の変化に富み、一見して「カワイイ」という印象を受ける。彼が収集し愛玩した絵画と、そのこだわりの表装に見られる美的センスが、こんなところにも表れているのを感じる。

#### 【註】

- 1) 小石川区編輯『小石川区史』小石川区役所, 1953, p.963-965
- 2) 大正12年9月2日勅令第399号
- 3) 大正12年9月3日勅令第401号
- 4) 大正12年9月3日関東戒厳司令官命令第1号(陸軍省編『陸軍省沿革史:自明治三十七年至大正十五年. 附録』p.266-267 収載)
- 5) 大阪朝日新聞, 1923年9月3日, 号外, p.3